

1920～40年代のアメリカにおける バスケットボールのドリブル技術の変遷 —ボール・キープの手段から攻撃的な技術への発達—

谷 釜 尋 徳

Changes in basketball dribbling technique in America in the 1920s-1940s
—Development from a means of keeping the ball to an offensive technique—

TANIGAMA Hironori

Summary

This paper discusses changes in basketball dribbling technique in America in the 1920s-1940s. The results of the investigation can be outlined as follows.

There was no dribbling when basketball was first invented, but it was devised as a means of keeping the ball. In the 1920s, dribbling began to play a role as a means of moving the ball, but through the first half of the 1920s it had no offensive characteristics directly linked with scoring.

The dribbling technique at the beginning of the 1920s involved watching the ball, and thus the range in which the ball was manipulated was almost entirely limited to the front of the body. In the mid 1920s the ideal dribbling technique was to face the line of sight forward, but at the same time the technique changed to a movement where the ball was kept in the field of vision.

From the end of the 1920s to the beginning of the 1930s, many players began to use dribbling more than necessary, and dribbling became a target of criticism. On the other hand, the value of dribbling as an essential technique which players should learn was finally recognized.

After the mid 1930s, numerous variations of dribbling technique began to be seen. Also, at the end of the 1930s, dribbling developed as an offensive technique directly linked with scoring, while firmly maintaining its role as a means of moving the ball.

In the 1940s, dribbling developed further into an offensive technique, but the dribbler's line of site had not reached the point where it was completely facing forward.

1. 問題の所在

スポーツ運動技術¹⁾は「実践のなかで発展し、
実践によって変化し、たえず修正や改良が行われ、また全体的にあるいは部分的に古くなっている」と考えられている。ゆえに、現在において—

般的に普及している各種スポーツの技術は、すべからく歴史的な実践の蓄積のうえに成り立っているといえよう。その好例を、バスケットボールのドリブル技術³⁾に見出すことができる。

今でこそ、ドリブル技術は人々を魅了する華麗な要素を含んだプレーとなっているが、アメリカでバスケットボールが考案された当初はこの技術は存在していなかった。やがて、ボール・キープの手段としてドリブルが編み出され、その動作が一般妥当性を獲得してボールを移動させるための「技術」として定着していく。さらに、ドリブルは単なる移動手段のみならず得点に結び付け得る攻撃的な役割を獲得し、戦術との関連性を強めていくが、その過程でドリブルを実施する際の運動経過(＝技術)には明確な変化が現れていたに違いない。そこで本稿は、アメリカにおけるバスケットボールのドリブル技術の変遷過程を明らかにすることを目的とする。

金子は「一般妥当的な構成要素によって成立している技術は、『現在においては』という時間的制約をうけざるをえない。」⁴⁾と説く。なぜなら「運動技術が人間の運動に関わるものである限り、不変の技術は存在しない」⁵⁾からである。だとすれば、過去に生じた技術の変化を時間軸に乗せて解き明かすことができれば、金子がいう技術の持つ「時間的制約」という特徴が浮かび上がってくると考える。ここに、本稿においてバスケットボールの技術の問題を歴史的な課題として取り上げることの意義を見出すことができよう。ドリブル技術の変遷過程が歴史的視点から明るみに出されれば、それは今後もバスケットボールの技術全般が諸々の影響を受けながら絶えず変化していく可能性を持っていることを示唆するものとなり得るからである。

さて、これまでアメリカにおけるバスケットボールのドリブル技術の史的展開に関しては、

Naismith⁶⁾, Bunn⁷⁾, Cooperら⁸⁾, Knudson⁹⁾, Isaacs¹⁰⁾, 水谷¹¹⁾, Webster¹²⁾, 笈田ら¹³⁾, 日本バスケットボール協会¹⁴⁾, 大川¹⁵⁾, などによって論じられてきた。これらの諸研究においては、ルールの変遷と絡めたドリブルの技術発達史が語られている。しかしながら、その時間的経過の中で、ドリブル技術が具体的にどのような変化を辿っていったのかについては明示されていない。

本稿において主な歴史資料として位置付けるのは、1920～40年代のアメリカで刊行されたバスケットボールの指導書である。1920年代に入ると、大学のコーチを中心にバスケットボールの本格的な指導書が世に送り出されるようになるが¹⁶⁾、そこには当時代のバスケットボールを反映する理想的な技術が解説されていると考えられるからである。この類の史料を通してドリブル技術の分析を試みるにあたっては、これまでスポーツ運動技術の問題を中心的に扱ってきたスポーツ運動学的な視点を適宜援用するものとした。

研究の対象期間は、アメリカのバスケットボール界において「技術や戦術の新しい開花の兆し」¹⁷⁾がみられたとされる1920年代から、ドリブルの技術や役割が多様化し今日にほど近い攻撃性を具備するに至った1940年代までとした。

ところで、バスケットボールの基礎的な技術(ドリブル)を研究対象として取り上げる本稿では、その変遷と戦術との関係を見逃すことはできない。独自の「球技戦術論」を世に問うたシュテューラーらが、ボールゲームの競技力の前提条件を論じる中で「ボールゲームにおける技術と戦術は、(中略)互いに独立した二つの要因として競技力構造に組み込まれているのではなく、統一した技術的・戦術的競技力要因として一体化しているのである。」¹⁸⁾と言及するように、バスケットボールの技術と戦術は無視し得ない間柄にあるからである。

アメリカにおけるバスケットボールの戦術に関する歴史学的な研究は、管見では Bee¹⁹⁾、Cooper²⁰⁾、吉井²¹⁾、大川²²⁾、Krause²³⁾、などによって試みられている。そこで、本稿の内容もこうした従前の戦術史研究の成果に依拠しながら、ドリブル技術の変遷と戦術との関連性を念頭におくものとした。

なお、日本バスケットボール協会によれば、バスケットボールの戦術とは「局面を開くための方法論」²⁴⁾のことであるという。そのため、本稿においてドリブル技術と関わって「戦術」という文言を用いる場合、それはドリブル技術を用いて局面を開こうとする行動を意味している。

2. ボール・キープの手段としてのドリブル技術の誕生

本稿が主な対象とする1920～40年代のドリブル技術の検討に先立って、ここではその前史として、バスケットボールにおいて「ドリブル」がいかなる経緯で誕生し、その後のルール変更によってどのような影響を受けたのかについて検討する。

2-1 ドリブル誕生の経緯

1891年に Naismith が考案したバスケットボールは、13条のルールによって規定されたゲームであった。その第3条に「プレーヤーはボールを保持したまま走ってはならない。ボールを受けた位置にとどまり、そこからパスをしなければならない。ただし、相当なスピードで走りながらボールを受けた場合は、多少は許容されることもある。」²⁵⁾と謳われている。このルールは、バスケットボール競技の根幹をなすトラベリングの原形と捉え得るものであるが、ここにドリブル誕生の契機が潜んでいた。

移動することを禁じられたボール保持者は、至

近距離でディフェンスに激しくプレスされた際には「こらえきれず、思わずコンパスのように片足は同位置のまま片足を動かして逃れた」²⁶⁾という打開策を講じている。こうして「ディフェンスからボールをキープするときの重要な技術」²⁷⁾としてピボットが生み出された。それでも、ボール保持者は場所の移動を禁じられているので、ディフェンスがなおもプレッシャーをかけてきた場合の対処が必要となる。そこで、ディフェンスから離れた場所に一旦ボールをバウンドさせ、そのボールが空中にある間に場所を移動し、再び自らボールを保持することでディフェンスのプレッシャーを回避する術が編み出されたのである。これを繰り返しても上記のルール（第3条）には抵触しないため、ここにドリブルが誕生をみるに至ったといえよう。

周知のように、バスケットボールのオフENSEの技術はディフェンスとの対峙関係において成立しているが²⁸⁾、ドリブルはまさにこの観点から誕生した打開策であったといえる。ドリブルはディフェンスのプレッシャーを回避すべく、ピボットの延長線上に派生したと捉え得るからである。

このように、バスケットボール考案当初のドリブル誕生の経緯を振り返ると、ドリブルは今日に比して明らかに攻撃性に乏しく、消極的な意味合いを持っていた。考案者の Naismith が「はじめは、ドリブルはディフェンスからボールを守る手段であった。」²⁹⁾と回顧しているように、ドリブルは当初ボール・キープの役割を付与されていたに過ぎなかったのである。

2-2 ルール変更がドリブル技術に及ぼした影響

バスケットボールの技術発達史の解明に取り組んだ笈田らは「技術や戦術への影響を考えた場合、ルールの存在を無視することはできない。」³⁰⁾と指摘する。また、初期のバスケットボール史の

ルールに関して最も議論を要するものは、ドリブルにまつわるルールであるとの見解も示されている³¹⁾。そこで以下において、ルール変更がドリブル技術に及ぼした影響を検討することにした。

先にドリブルの誕生の経緯を明らかにしたが、その後ドリブルは相次ぐルール変更による規制を受けながら、徐々に今日に類似した形態を整えていく。日本バスケットボール協会が編んだ『バスケットボール指導教本』には、1892～1936年の期間におけるドリブルに関するルール変更の概要が整理されている³²⁾。その中から、1920年代以前に該当する1892～1916年の期間を対象として一覧表にしたものが表1である。

表1の中でとりわけ目を引くのは、1901～02年のルール変更でドリブル後のショットが禁じられ

た点である。当該のルール変更については、Lambert が「ルールが変わったことにより、ドリブラーはショットできずドリブル後は味方にパスをしなければならなくなった。」³³⁾と回顧している。このルール上の制約は、ドリブルの技術としての発達を抑制するものであったことはいうまでもない。

やがて、1915～16年のルール変更によって、ドリブル後のショットを禁ずるルールは解消されている。このことは、それまでボール・キープの手段であったドリブルが、得点に直結し得る攻撃的な技術として発達していく可能性を拓くものとなった。水谷が、これを契機として「ドリブルショットやフェイクして相手を抜くプレイが生まれ、オフェンスがスピーディになり、攻撃技術が

表1 ドリブルに関するルールの変遷 (1892～1916年)[※]

ルールの試行年代	主なルール変更の概要
1892～95年	片手もしくは両手で、ボールをどの方向にたたいてもよい。
1898～99年	あるプレーヤーがボールを両手でキャッチした後、床にバウンドさせた場合、次に他のプレーヤーがそのボールに触れた後でなければ、再びそのボールに触れることはできない。また、プレーヤーは両手では許されないが、片手であれば何回でもボールを弾ませてよい。
1899～1900年	ドリブルの最中は、両手でボールに触れることができるのは1回だけとする。
1901～02年	ドリブル後のショットはバイオレーションとする。1回だけボールを床に弾ませて進むプレーは、ドリブルとみなさない。
1903～04年	1回ずつボールを床に弾ませて進むプレーは、ドリブルとみなす。その際、ボールを拳で叩いてはならない。
1904～05年	ドリブルとは、プレーヤーが片手もしくは両手で1回以上ボールを弾ませ、その間に2歩以上進むプレーをいう。
1905～06年	ドリブルとは、プレーヤーが投げる、バウンドさせる、たたく、転がす、のいずれかの方法によってボールを弾ませ、さらにそのボールに他のプレーヤーに触れるまでの間に、そのプレーヤーが片手または両手で1回以上ボールに触れた場合をいう。
1908～09年	ルールに違反しないドリブルとは、そのドリブルが連続しておこなわれている場合とする。
1911～12年	ボールを片手で持つか、両手でボールに触れるまでの間は、ドリブラーはいかなる方法でいかなる方向にもドリブルしてよい。
1915～16年	ドリブルの後、ショットしてもよい。

※日本バスケットボール協会編：『バスケットボール指導教本』大修館書店、2002より作成。

多様化した³⁴⁾と指摘しているからである。

3. ボールの移動手段としてのドリブル技術の発達とその特徴

3-1 ボールの移動手段としてのドリブル技術の発達

前述したように、バスケットボール考案当初のドリブルは、ディフェンスからボールを守るためのボール・キープの手段であった。それが、1920年代になるとドリブルに期待された役割にも変化が生じている。

例えば、Wardlaw らは「ボール保持者の前方にスペースがあるとき、ドリブルはボールを移動させる手段となる。」³⁵⁾と記述している。また、Holman も「ドリブルはパスの代わりにボールを運ぶための手段として用いるべきである。」³⁶⁾とし、Wardlaw らと同様の見解を示している。ゆえに、この時代のドリブルはボール・キープのみならず、パスに代わる二次的なボールの「移動手段」としての役割も見出されていたといえよう。

しかしながら、当時のドリブルは、その役割からしても得点に直結し得るような攻撃性を備えてはいなかった。それは、Meanwell が「多くのコーチはドリブルを不要なプレーと考え、その使用を禁じている。」³⁷⁾と言及し、Allen も「バスケットボールのプレーの中で最も議論を要するものはドリブルである。大半のコーチはドリブルを使用しない。」³⁸⁾と述べていることから窺える³⁹⁾。1920年代前半頃まで、バスケットボールのゲームにおいてドリブルは重要視されていなかったのである。

次いで、この時期のドリブル技術の具体像に迫ってみたい。前出の Wardlaw らは、ドリブルは腰より高い位置で突いてはならないと述べ、その理由の1つとしてボールがドリブラーの視野に収まらないという問題点をあげている⁴⁰⁾。こ

に、1920年代初頭のドリブル技術は、ボールを注視しながら行なうものであったと見なすことができよう。この技術的な要点が「ドリブルは身体の正面で行なう」⁴¹⁾という動作を必然化したものと考えられる。ボールを視野に収めておくということは、ドリブルが可能な範囲がほぼ身体の正面に限定されたことを意味しているからである⁴²⁾。

図1、2は Wardlaw らの“Basket-ball”⁴³⁾および Holman の“Scientific basketball”⁴⁴⁾に掲載されたドリブル技術の理想像である。これによって、当時のドリブル技術がボールを注視しながらやや前傾姿勢を取り、身体の正面で行なうものであったことがイメージされよう。この時代のアメリカでは、今日では一般的に行なわれている股下を通すレッグ・スルー・チェンジや身体の後ろを通すバック・チェンジなど、ボールが視界から消えるようなドリブル技術は発達すべくもなかったのである。

また、今日のドリブル技術では、ボールが床にバウンドしてある程度の高さまで到達した際、大抵の場合は次なる動作を意識して腕は曲がった状

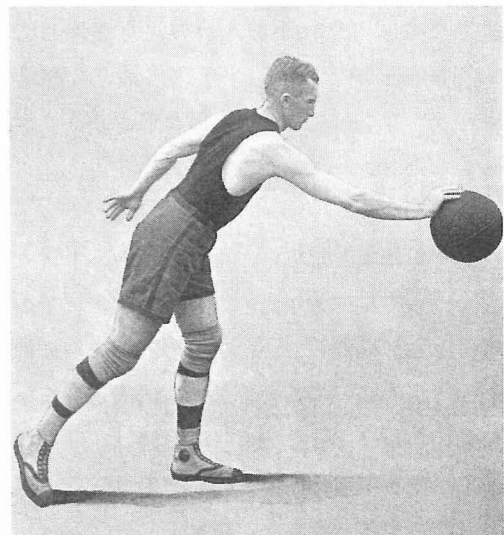


図1 1920年代初頭のドリブル技術①※

※Wardlaw and Morrison, Basket-ball, Charles Scribner's Sons, 1922より転載。

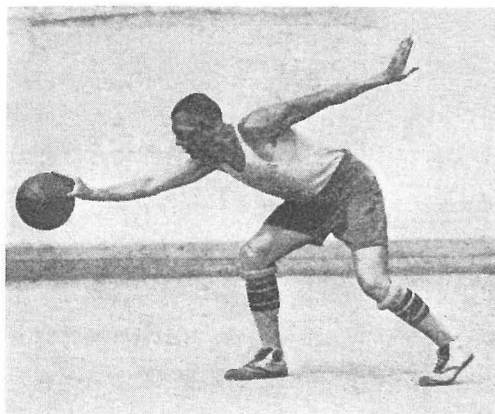


図2 1920年代初頭のドリブル技術②※
※Holman, Scientific basketball. Incra Publishing Company, 1922より転載。

態となる。しかしながら、図1, 2をみると、いずれもドリブラーの腕はほぼ伸びきった状態であることから、1920年代には腕の屈伸運動を利用して巧みにボールを操作する技術は未だ生み出されていなかったと推察されよう。

このようにしてボールを注視するドリブル技術は、バスケットボールのゲームにおけるドリブルの役割を著しく制限していた。例えば、Holmanはドリブラーがボールだけに集中していると、ゴールにカッティングしてくる味方プレーヤーを見逃してしまう恐れがある旨の注意を促している⁴⁵⁾。Holmanが得意として世に広めた攻撃戦術は「ギブ・アンド・ゴー」と呼ばれたが、これはパスをしたプレーヤーが素早くゴール方向にカッティングし、リターン・パスを受けてショットするプレーを基本としていたためであろう⁴⁶⁾。

したがって、1920年代のドリブルはボールの移動手段として機能していたものの、その技術的な特徴が得点の絶好の機会を逸する原因ともなっていたといわねばならない。この当時は、ドリブル技術を戦術と関連付けてその妥当性を問うような思考は希薄であったことが窺えよう。

3-2 ドリブルの高さにみる技術的な妥当性

同じ頃、ドリブル中にボールをバウンドさせる高さについても一定の共通認識があった。このことについてAllenは、ドリブルは低い位置で行なった方がボールと身体をより良くコントロールできると主張している⁴⁷⁾。また、Meanwellはこの問題についてより詳しく言及しているので、当該の記述を以下に引いておきたい⁴⁸⁾。

多くの選手は、ドリブル中にボールをあまりにも高くバウンドさせすぎているため、ディフェンスに激しくプレスされた際にボールを素早く操作することができない。そのため、賢い選手は、腰の位置よりも低い高さにバウンドをおさえるよう心掛けている。

Meanwellの見解によって、ディフェンスの動きに対応し得るボール操作を行なう観点から、当時代においては「低い」ドリブルが理想とされていたことがわかる。

ところで、先に見たように、当時のドリブルがボールの「移動手段」であったとすれば、この技術にはドリブルを終えた後のプレーとの繋がりも考慮されていなければならない。多くの場合、ドリブルが得点に直結し得ないということは、ドリブラーが攻撃を継続させるために次に試行するプレーの選択肢は「パス」に限られていたことを意味するからである。スポーツ運動学的な見地からすると「2つの独立した運動技能をスムーズに結合させることは、終末局面と準備局面が中間局面に融合していくことに基づいている」⁴⁹⁾とされる⁵⁰⁾。つまり、ドリブルというボールを操作しながらの走運動の終末局面が、パスという投運動の準備局面を兼ねることによって、両者はスムーズに融合し得るのである。

他にも、ドリブルの高さはRubyによって論じ

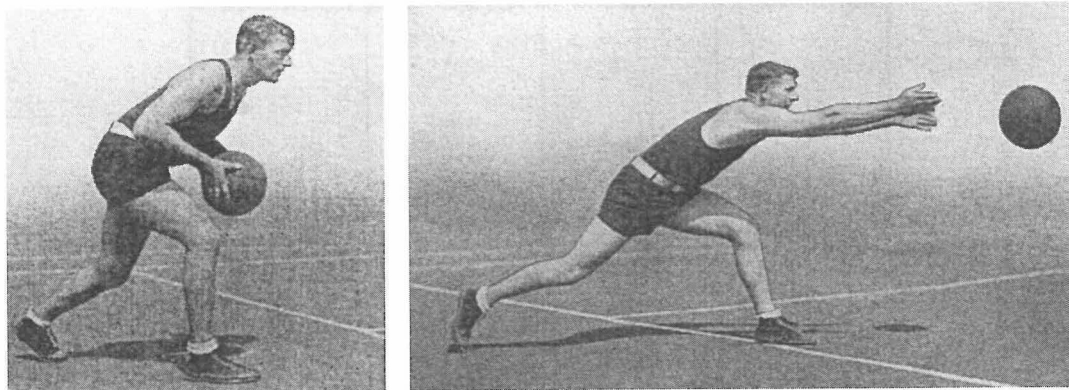


図3 1920年代中頃のアンダーハンド・パスの技術※

※Ruby, How to coach and play basketball. Bailey&Hime, 1926より転載。

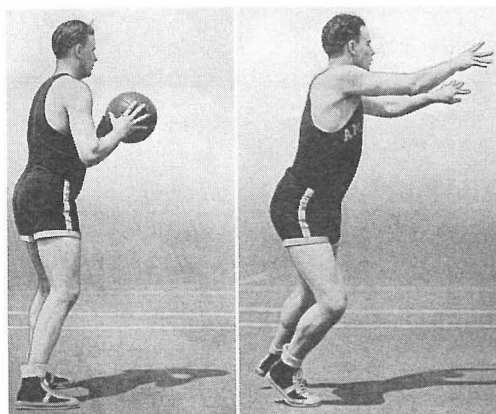


図4 1920年代中頃のプッシュ・パスの技術※

※Ruby, How to coach and play basketball. Bailey&Hime, 1926より転載。

られている。Rubyは「ドリブルの高さは通常、パスを出す時の高さによって決められるものである。アンダーハンド・パスを多用するチームは、プッシュ・パスを使うチームよりもドリブルを低くおさえるべきである。」⁵¹⁾と記述している。

引用文中の「アンダーハンド・パス」とは図3に示されるような低い位置から下手投げでリリースするパスのことで、「プッシュ・パス」とは図4のように胸部から押し出すようにしてリリースするパスを意味している。Rubyは、ドリブルを低い位置で行なうことは、ドリブルそのものを巧みに行なうにとどまらず、次なる運動課題（＝アンダーハンド・パス）への移行をもスムーズにす

るという点で、有効な技術たり得ると考えていたのである。この一連の見解は、この時期のドリブル技術にはパス技術を「先取り」⁵²⁾した運動経過がみられたことを想起させるものとなろう⁵³⁾。

4. 技術としてのドリブルの定着と戦術との関連性

4-1 技術としてのドリブルの定着と発達

1920年代半ばにさしかかると、コート上のエリアと絡めたドリブルの役割が説かれるようになる。Rubyは、図5のようにコート上を便宜的に4つのエリアに区画し、各エリアにおけるドリブルの用途を解説してみせた（矢印は攻撃の方向）⁵⁴⁾。その内容を整理したものが表2である。

Rubyのドリブルに関する見解が、当時代における一般的な傾向を反映しているかどうか定かではない。しかしながら、こうした考え方が示されたことは、1920年代半ばのアメリカでは徐々にドリブルが技術として定着してきたことの証左であると捉えておきたい。また、当時のプレーヤーがドリブルを頻繁に用いるようになったことは、Rubyによる「多くのプレーヤーは、パスができる時でもドリブルを優先させてしまう。」⁵⁵⁾との記述からも逆説的に推し量ることができる。

このように、ドリブルが技術として定着してく

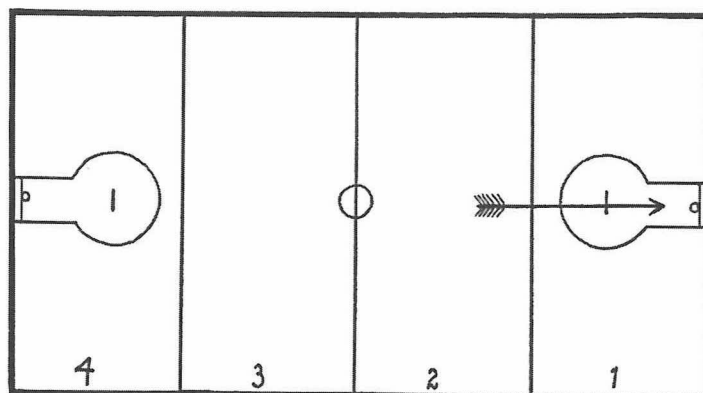


図5 ドリブルの用途からみたコートのエリア区分※

※Ruby, How to coach and play basketball. Bailey&Hime, 1926より転載。

表2 エリアごとのドリブルの用途※

エリア	ドリブルの用途
1	得点するために、ゴールに向かって短距離のドリブルを用いる。
2	サイドライン側にドリブルして、ゴール付近に待ち構えているディフェンスを自分の方へ引き付ける。
3	ディフェンスに体制を整えられても、安全にドリブルを使うことができる。このエリアでは、突如スピードのあるドリブルを使うことで、前線のディフェンスを突破することもできる。
4	ディフェンス・リバウンド獲得後、ただちにアウトレット・パスが出せなかった場合、サイドライン側に向かってドリブルで移動して広がることで、ディフェンスのプレッシャーを回避することができる。
1～4	全てのエリアに共通する用途は、密集地帯でルーズボールを獲得した時、センターからボールが外に出された時、スローインされたボールを受けた後、の3点である

※Ruby, How to coach and play basketball. Bailey&Hime, 1926より作成。

るのと時を同じくして、ドリブル中にボールを注視する従来の技術に若干の変化が見られるようになる。Barryは「多くのプレーヤーは機械的にドリブルを行ない、バウンドが最高点に達したあたりで目の下方でボールを見ることができる。」⁵⁶⁾と説く。同じく、Rubyも「ドリブル中はボールを注視してはならないが、周辺視野でボールを捉えておくべきである。」⁵⁷⁾との見解を示している。ゆえに、当時のドリブル技術は従来のようにボールをただ注視するものではなく、視線を前方に向けることを理想としながらも、それと同時にボールも視野に収めておくような技術へとシフトしたことが窺えよう⁵⁸⁾。

ともあれ、ドリブルが多少なりとも技術的な発達を遂げたことによって、プレーヤーはドリブルをしながらでもコート上の状況を確認することが可能になったとみられる。しかし、周辺視野を用いるといっても、ボールを視界に入れておくという点では従来と何ら変わりはない。したがって、ドリブルをする位置は依然としてボールが視野に収まる身体の正面に限られていたといえよう。

その後、1920年代末～1930年代初頭に至っても、ドリブルの地位が劇的に向上することはない。批判の対象となっていた。例えば、Blissは「バスケットボールは本来パスを主体にしたゲームであって、ドリブルはそのついで行なわれる

二次的なプレーでしかない。』⁵⁹⁾と指摘し、Lambert も「コーチはドリブルが二次的なプレーであって、第一に優先すべきプレーではないことをプレーヤーに理解させなければならない。』⁶⁰⁾との見解を表明している。当時のドリブル技術の発達には、ドリブルを過度に使用するプレーヤーを多数生み出し、そのことがゲームに支障をきたしたために上記引用文に代表されるような批判がなされたものと理解しておきたい。

その一方で、Holman が「ドリブルは近年のバスケットボールにおいて重要な部分を占めている。』⁶¹⁾と言及していることも看過できない。当時のドリブルは、二次的なプレーではあったものの決して軽視し得るものではなく、プレーヤーが少なからず習得すべき技術として位置付けられていたと類推されるからである。1930年代初頭に至って、ドリブルはいよいよ「技術」としての価値を認められたといえよう。

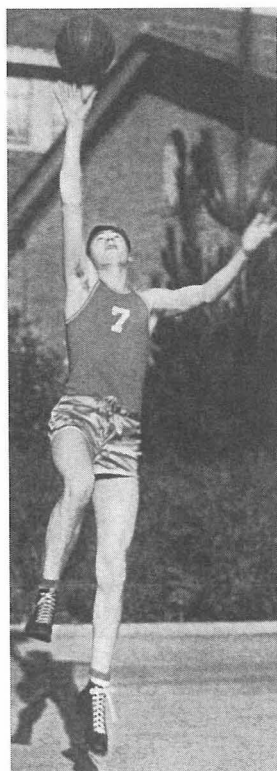


図6 Luisetti のワンハンド・ショットの技術※
※Bunn, Basketball methods, Macmillan, 1939より転載。

4-2 ドリブル技術の多様化と戦術との関連性

1930年代中頃、スタンフォード大学の Luisetti はワンハンド・ショットを武器に活躍し、この新しい技術を世に広めている⁶²⁾。Luisetti が得意としたのは、ドリブル後にランニング・ステップでジャンプして、空中でショットする技術であった⁶³⁾ (図6参照)。この時期のドリブル技術には、すでにショットと組み合わせる用いる応用技が登場していた可能性が示唆されるものである⁶⁴⁾。

こうした観点から Jourdet らの著作をみると、ドリブルの用途の1つに「ショットと組み合わせた攻撃方法として用いる」⁶⁵⁾と記載されていることがわかる。したがって、1930年代末頃のドリブルは、従来のボールの移動手段という役割を堅持しながら、得点に直結し得る攻撃的な技術としても発達していたと考えられる。

他にも Jourdet らの同上書には、ドリブルのペースを変える、ディフェンスから遠い方の手でドリブルをする、素早くドリブルの方向を転換する、フェイントを使ったドリブルをする、といった内容が説かれている⁶⁶⁾。また、Bunn は、ドリブル中にボールを操作する位置に関する詳細な解説を加えている。すなわち「多くのコーチはドリブルを身体の前でつくように教えているが、実際にディフェンスの前でドリブルをする場合、ドリブラーは身体でボールをつく。』⁶⁷⁾と述べ、ディフェンスとの対峙関係を意識して実戦に則した方法論を提示した。

スポーツの攻撃戦術には、概ね「自分の行動を通して競技相手に対する有利さを獲得する」⁶⁸⁾という側面が認められるという。ゆえに、上記の方法論はドリブル技術を駆使した個人戦術として捉

えられる。このように、1930年代末期にはドリブル技術が多様化し、戦術との関連性が見出されていたことが確かめられよう。

こうして、攻撃的技術としてのドリブルの価値が浸透していくにつれて、ドリブルを必要以上に用いるプレーヤーがより一層増加していったものと思われる。Murphyは「パスが出来る時はドリブルをしてはならない。ドリブルする前にチームメイトがフリーになっているかどうか確認せよ。」⁶⁹⁾と説いているが、これを逆説的に解釈すれば、当時のプレーヤーの多くが、味方に有効なパスができる状況であってもドリブルを優先させる傾向にあったといえる。

同様の視点から、ドリブルの使用に対する批判的な見解を提示したのがBunnである。Bunnによれば、ドリブルの使用には次のような弊害が懸念されるという⁷⁰⁾。

ドリブルの最大の害は、ドリブルが習慣づいてしまうことであろう。多くのプレーヤーは、ボールを保持するやいなやドリブルをついてしまう。こうしたプレーヤーは知らず知らずのうちに、できるだけ長くボールを保持するようになり、パスは最終的な手段となってしまう。

上記引用文によれば、Bunnはドリブルそのものを否定していたというよりも、これが有効なチームプレーの妨げとなることを危惧していたと考えてよい。

ともあれ、1940年代初頭になると、ドリブルは戦術との関連性をより一層強めて攻撃的な技術へと発達していく。例えば、Deanは「ディフェンスの頭越しにシュートするためには、フェイク・ドリブルを使ってディフェンスを後退させることが妥当な方法である。」⁷¹⁾と言及している。ここでいうフェイク（フェイント）とは「敵の反応を誤

らせようとするのがねらいになっているものである。単に見せかけだけで実際には行なわれない運動を敵に先取りさせようとする。」⁷²⁾と説明される現象である。

この観点からみると、ボール保持者がドリブルでディフェンスを出し抜くプレーが「フェイク」として成立していたことは、当時ドリブル技術を駆使して目の前のディフェンスを抜き去ることが、一般妥当的な戦術として認知されていたことの証左となろう。「見せかけ」の動作たるフェイク・ドリブルが市民権を得ていなければ、ディフェンスはそのプレーを「先取り」して後退することはなく、頭越しのシュートを防ぐべく積極的にオフenseとの間合いを詰めることができたと考えられるからである。

このようにして、ドリブルの用途が多様化し戦術との関連性を強めていったが、具体的なボールの操作技術が著しく発達したわけではなかった。

先に、1920～30年代におけるドリブル中の視線の取り方として、ボールを視野に入れながらドリブルをする傾向にあったことを明らかにしたが、この事情は1940年代に至っても大幅な改善はみられなかった。例えば、Navyは「昨今のドリブル技術には修正すべき点がある。ドリブラーがスピードを出そうとする時、その視線はフロアに向けるべきである。」⁷³⁾と指摘している。当時代においても大半のドリブラーがボールを注視していたがために、Navyはこれを修正点として認識していたと推し量ることができよう。これとほぼ同様の見解がHobsonの1948年の著作⁷⁴⁾にもみられることを併せて考えると、1940年代末期に至ってもドリブラーの視線は完全に前方に向けられるようにはなっていなかったといわねばならない。

Ruppは、この時期のドリブルにまつわる弊害を下記のように書き綴っている⁷⁵⁾。

ドリブルの最大の弊害は、ドリブラーがチーム全体の動きを無視し、自分勝手なプレーに陥りやすい点である。1人がドリブルをしている最中、他の4人は何もしていない状態となる。これが得点に結びつくプレーならともかく、チームメイトを動揺させるものであるなら、ドリブルは使用すべきではない。ドリブルのもう一つの弊害は、ドリブルは結果的にディフェンスに味方をマークする時間的な余裕を与えてしまうことである。また、非熟練者がドリブルを用いると、味方の動きが分からなくなり、いつでもへパスすれば良いのか判断がつかなくなる。

上記引用文に見られるような弊害は、多くの場合はドリブル中の視線の取り方が原因となっていたに違いない。ボールを視野に入れながら行なうドリブルではコート上の攻防の状況を把握することは困難であり、そのことが結果として「自分勝手なプレー」を生み出していたと考えられるからである。

以上述べてきたように、1930～40年代にかけてドリブル技術は着実に発達を遂げ、ボールの移動手段のみならずショットに結びつけ得る攻撃的な技術となっていったものの、ドリブルを必要以上に多用することに関しては一定の批判が加えられていたといえよう。

5. 結び

本稿は、1920～40年代のアメリカにおけるバスケットボールのドリブル技術の変遷を考察するものであった。検討の結果は、以下のように整理することができる。

考案当初のバスケットボールにおいてドリブルは存在していなかったが、ボール保持者がディフェンスのプレッシャーを回避するための手段とし

てこれを編み出した。当初、ドリブルはボール・キープの役割を付与されていたに過ぎなかった。また、1915～16年のルール変更によって、それまで10年以上禁じられてきたドリブル後のショットが容認されるようになる。これは、ドリブルが得点に直結し得る攻撃的な技術として発達していく可能性を拓くものとなった。

1920年代になると、ドリブルはボール・キープに加えてパスに次ぐボールの移動手段の役割を担うようになった。しかし、1920年代前半頃までドリブルは重要な技術として認識されておらず、得点に直結し得るような攻撃性も備えていなかった。

1920年代初頭のドリブル技術は、ボールを注視しながら行なうものであったため、ドリブルが可能な範囲はほぼ身体の正面に限定されていたが、ドリブル中にボールをバウンドさせる高さについては一定の共通認識があった。すなわち、ディフェンスに対抗し得るボール操作を行なう観点から「低い」バウンドが理想とされていたのである。また、ドリブル中のバウンドを低くおさえることは、次なる運動課題（＝アンダーハンド・パス）への移行をスムーズにするという点でも、有効な技術だと考えられていた。

1920年代半ばにさしかかると、ドリブルは徐々に技術として定着していく。すると、ドリブル技術は従来のようにボールを注視するものではなく、視線を前方に向けることを理想としながらも、それと同時にボールを視野に収めておくような運動経過へとシフトしていった。

1920年代末～1930年代初頭にかけてドリブルを過度に用いる傾向がみられたために、ドリブルは批判の対象となっていた。その一方で、当時のドリブルは依然としてパスに代わる二次的なプレーではあったものの、プレーヤーが習得すべき「技術」としての価値が認められるに至っている。

1930年代中頃以降、ドリブル技術にはショットと組み合わせた応用技が登場するなど、豊富なバリエーションがみられるようになる。1930年代末頃には、ドリブル技術はボールの移動手段という役割を堅持しながら、得点に直結し得る攻撃的な技術としても発達していった。しかし、攻撃的技術としてのドリブルの価値が広く浸透していくにつれて、ドリブルを必要以上に用いるプレーヤーがより一層増加し、その大半が有効なパスができる状況であってもドリブルを優先させていた。

やがて、1940年代初頭になるとドリブルはさらに攻撃的な技術へと発達し、ドリブルを駆使して目の前のディフェンスを抜き去ることが、一般妥当的な戦術として認知されるに至っている。しかしながら、これはボールの操作方法が著しく発達したことの証左ではなかった。1940年代末期に至っても、大半のドリブラーはいまだにボールを注視しており、その視線が完全に前方に向けられるようにはなっていなかったからである。

以上述べてきたように、本稿においてはバスケットボールのドリブル技術が歴史的な時間のなかで絶えず変化してきたことが明らかとなった。このことは、バスケットボールの技術全般が今後も諸々の影響を受けながら変化し続けていく可能性を示唆するものとなろう。

＜注記および引用・参考文献＞

- 1) 本稿が意図するバスケットボールの「技術」とは、岸野の見解によっている。岸野は「正しく目的にむかって経済的に動く経過において、運動は技術と関連してくる。」という理解のもと、「運動とは、運動経過のことであり、運動技術とは、客観的な『運動経過の合目的形態』である」との見解を示している(岸野雄三:「スポーツの技術史序説」『スポーツの技術史』大修館書店、1972、p.14)。また、岸野は上記のように規定される「技術」を歴史的な課題として取り上げる「技術史」に関しては「体育史研究としての技術史は、スキルとも関連させながら運動のテクニックの歴史の変遷を研究する領域である。」(岸野雄三:『体育史』大修館書店、1973、p.83)と

説いている。

- 2) マイネル著、金子明友訳:『スポーツ運動学』大修館書店、1981、p.261
- 3) 今日におけるドリブルの定義を『競技規則』を通してみると「ドリブルとは、ライブのボールをコントロールした1プレーヤーが、ボールを投げたりたたいたりころがして床に触れさせたり、バックボードをねらってボールを投げて、ボールを移動させることをいう。」(日本バスケットボール協会編 審判・規則部編:『2011～バスケットボール競技規則』日本バスケットボール協会、2011、p.42)と解釈されている。ゆえに、先にみた「技術」の概念規定に鑑み、本稿におけるドリブル技術とは上記の行動を達成するための経済的かつ合目的な運動経過を指すものとした。
- 4) 金子明友:「運動技術論」『序説運動学』大修館書店、1968、p.109
- 5) 金子明友:「運動学からみたスポーツ」『スポーツの科学的原理』大修館書店、1977、p.290
- 6) Naismith, Basketball—Its origin and development—, Association Press, 1941, pp.63—66
- 7) Bunn, Basketball technique and team play, Prentice Hall, 1964, pp.57—58.
- 8) Cooper and Siedentop, The theory and science of basketball, Lea&Febiger, 1969, pp.5—18
- 9) Knudson, The evolution of men's amateur basketball rules and the effect upon the game, Springfield College, 1972, pp.272—290
- 10) Isaacs, All the moves—A history of college basketball—, Lippincott, 1975, pp.23—24.
- 11) 水谷豊:「バスケットボール」『最新スポーツ大事典』大修館書店、1987、pp.981—991/水谷豊:「バスケットボールの創成」『体育学研究』50巻3号、2005.5、pp.249—258/水谷豊:『バスケットボール物語』大修館書店2011、pp.72—74
- 12) Webster, Basketball's amoeba defense, Parker Publishing, 1984, pp.21—22
- 13) 笈田欣治・水谷豊・藤木大三:「アメリカ・バスケットボールの技術発達史」『関西大学文学論集』40巻4号、1991.3、pp.79—159
- 14) 日本バスケットボール協会編:『バスケットボール指導教本』大修館書店、2002、pp.26—31
- 15) 大川信行:「バスケットボールのボールの規格化に関する史的考察」『スポーツ産業学研究』17巻1号、2007.3、pp.21—32
- 16) 大川信行:「バスケットボールのコーチ誕生と初期コーチたちの戦術について」『北陸体育学会紀要』45号、2009.3、pp.9—22
- 17) 笈田欣治・水谷豊・藤木大三:「アメリカ・バスケットボールの技術発達史」『関西大学文学論集』40巻4号、1991.3、p.119
- 18) シュティラーほか著、唐木國彦ほか訳:『ボールゲーム指導事典』大修館書店、1993、p.36

- 19) Bee, Man to man defense and attack, A.S.Barnes and Company, 1942/Bee, Zone defense and attack, A.S.Barnes and Company, 1942/Bee, Winning basketball plays—By America's foremost coaches—A.S.Barnes, 1950
- 20) Cooper and Sidentop, The theory and science of basketball, Lea & Febiger, 1969
- 21) 吉井四郎：『バスケットボールのコーチング—戦法・作戦編—』大修館書店, 1977/吉井四郎：『バスケットボール指導全書 2—基本戦法による攻防—』大修館書店, 1987/吉井四郎：『バスケットボール指導全書 3—特殊戦法による攻防—』大修館書店, 1989
- 22) 大川信行：「バスケットボールのポジションに関する史的考察」『スポーツ史研究』13号, 2000.3, pp.13-28/大川信行：「バスケットボールのゾーン・ディフェンス誕生までの経緯」『スポーツ史研究』16号, 2003.3, pp.1-17/大川信行：「バスケットボールのフリースローに関する史的考察」『スポーツ史研究』17号, 2004.3, pp.15-30/大川信行：「バスケットボールにおけるロングパス・ファストブレイクの変遷について」『北陸体育学会紀要』41号, 2005.3, pp.53-63/大川信行：「バスケットボールのファストブレイク誕生までの経緯」『体育史研究』23号, 2006.3, pp.51-68/大川信行：『バスケットボールの戦術に関する歴史的研究（1891～1945まで）』日本体育大学博士学位論文, 2007/大川信行：「バスケットボールのジャンプボールに関する一考察」『富山大学人間発達科学部紀要』3巻2号, 2009.3, pp.63-72
- 23) Krause and Pim, Coaching basketball, Mc Graw Hill, 2002 /Krause and Pim, Lessons from the legends, Coaches Choise, 2005
- 24) 日本バスケットボール協会編：『バスケットボール指導教本』大修館書店, 2002, p.109
- 25) Naismith, Basketball—Its origin and development—Association Press, 1941, p.53
- 26) 水谷豊：「バスケットボール」『最新スポーツ大事典』大修館書店, 1987, p.987
- 27) 水谷豊：『バスケットボール物語』大修館書店, 2011, p.73
- 28) 岸野雄三：「運動学の対象と研究領域」『序説運動学』大修館書店, 1968, p.23/稲垣安二：『球技の戦術体系序説』梓出版社, 1989, pp.49-50/シュティラーホカ著, 唐木國彦ほか訳：『ボールゲーム指導事典』大修館書店, 1993, pp.74-75/會田宏：(1994)「ボールゲームにおける戦術の発達に関する研究」『スポーツ運動学研究』7号, 1994.11, pp.25-32
- 29) Naismith, Basketball—Its origin and development—Association Press, 1941, p.63
- 30) 笈田欣治・水谷豊・藤木大三：「アメリカ・バスケットボールの技術発達史」『関西大学文学論集』40巻4号, 1991.3, p.118
- 31) Knudson, The evolution of men's amateur basketball rules and the effect upon the game, Springfield College, 1972, p.272
- 32) 日本バスケットボール協会編：「バスケットボールの技術変遷史」『バスケットボール指導教本』大修館書店, 2002, p.31
- 33) Lambert, Practical basketball, Athletic Journal, 1932, p.63
- 34) 水谷豊：「バスケットボール」『最新スポーツ大事典』大修館書店, 1987, p.989
- 35) Wardlaw and Morrison, Basket-ball, Charies Scribner's Sons, 1922, p.21
- 36) Holman, Scientific basketball. Incra Publishing Company, 1922, p.32
- 37) Meanwell, Basket ball for men, Democrat Printing Company, 1922, p.82
- 38) Allen, My basket-ball bible, Smith Grieves, 1924, p.113
- 39) Allenの“My basket-ball bible”(1924)は、当時多くの指導者が文字通りバイブルとして頼ったとされている(大川信行：「バスケットボールのコーチ誕生と初期コーチたちの戦術について」『北陸体育学会紀要』45号, 2009.3, p.12)。
- 40) Wardlaw and Morrison, Basket-ball, Charies Scribner's Sons, 1922, p.22
- 41) Wardlaw and Morrison, Basket-ball, Charies Scribner's Sons, 1922, p.22
- 42) 今日のドリブル技術における視線の取り方を、日本バスケットボール協会が編んだ『バスケットボール指導教本』によってみていくと、そのポイントとして「ボールを見ないでヘッドアップを心がける。」(日本バスケットボール協会編：『バスケットボール指導教本』大修館書店, 2002, p.79)という点が要求されていることがわかる。
- 43) Wardlaw and Morrison, Basket-ball, Charies Scribner's Sons, 1922
- 44) Holman, Scientific basketball. Incra Publishing Company, 1922
- 45) Holman, Scientific basketball. Incra Publishing Company, 1922, p.33
- 46) Holman, Scientific basketball. Incra Publishing Company, 1922, pp.29-30
- 47) Allen, My basket-ball bible, Smith Grieves, 1924, p.113
- 48) Meanwell, Basket ball for men, Democrat Printing Company, 1922, pp.82-83
- 49) マイネル著, 金子明友訳：『スポーツ運動学』大修館書店, 1981, p.164
- 50) マイネルによれば、どのような非循環運動にもその局面の役割から、導入的な準備局面、運動課題を実際に解決していく主要局面、その運動が次第に消失していく終末局面の3分節(=局面構造)が成立するという(マイネル著, 金子明友訳：『スポーツ運動学』大修館書店, 1981, p.156)。
- 51) Ruby, How to coach and play basketball. Bailey&Hime, 1926, pp.92-93
- 52) マイネルは運動の「先取り」について、次のように説いている。

「先取りというのは、次につづく運動課題をめざして先行する運動局面あるいは運動経過全体がモルフォロギ的に同調を示すことである。その変容は運動の全体構造のなかにはっきりと現われるものであり、それは客観的に明らかに確認できるものである。」(マイネル著、金子明友訳:『スポーツ運動学』大修館書店, 1981, p.229)

また、『スポーツ科学辞典』には、「先取り」の項目において「スポーツにおける先取りは、運動課題や状況に制約されて、運動行動を次につづく運動局面や運動経過全体にあらかじめ同調させることのなかに見い出される。」(バイヤー編、朝岡正雄監訳:『スポーツ科学辞典(三版)』大修館書店, 2001, p.186)と記述されている。なお、この運動の「先取り」現象については、石塚浩:「運動の先取りをどうとらえるか」『運動学講義』大修館書店, 1990, pp.235-239)。

- 53) 当時のドリブル技術の問題は、次なる運動課題の「先取り」のみによって説明しつくされるものではない。フェッツが運動の「先取り」という現象には「物理的周界状況への適応」という側面もみられると指摘しているからである(フェッツ著、金子明友・朝岡正雄訳:『体育運動学』不味堂出版, 1979, p.254)。この「物理的周界状況」のなかでも、当時代のドリブルの高さに影響を及ぼしていた要素として、施設や用具の問題があげられる。運動用具史研究の必要性をいち早く説いた岸野は、その方法上の留意点として「身体運動の側面から人間の問題としてアプローチしていかなければならない。」(岸野雄三:『体育史』大修館書店, 1973, p.90)と指摘した。このことは、用具そのものの変遷にとどまらず、用具を使ってスポーツを行なう人間の「スポーツ運動技術」との関連性を追及することこそ肝要であることを示唆するものである。加えて、岸野が「施設が改良され、用具が開発されることによって、技術も高度になり、逆に技術が高度になるにつれて、施設や用具も改良されてくる。」(岸野雄三:「スポーツの技術史序説」『スポーツの技術史』大修館書店, 1972, p.26)と述べているように、スポーツに関する施設・用具と技術との間には相互補完性が認められる。施設や用具は、運動者の可視的な動作を本質的に規定しているのである(ゲナー著、佐野淳・朝岡正雄監訳:『スポーツ運動学入門』不味堂出版, 2003, p.71)。これを本稿の研究課題に引きよせて考えてみると、当時のドリブル技術に影響を与えた施設や用具として、それぞれ「床」の構造や「ボール」の性能等が想定される。この観点からすれば、当時のドリブル技術には施設や用具といった「物理的周界状況」を先取りした運動経過がみられたと仮定することも可能であるが、当該の問題の解明は今後の課題として残しておきたい。なお、日本のバスケットボール史を紐解いてみると、施設・用具

をはじめとする外的環境が、ドリブルやショットの運動経過に影響を及ぼしていたことが確かめられる(谷釜尋徳:「日本におけるバスケットボールの専用球の改良とそれに伴うドリブル技術の発達に関する技術史的考察」『スポーツ運動学研究』21号, 2008.11, pp.45-59/谷釜尋徳:「日本におけるバスケットボールの競技場に関する史的考察」『スポーツ健康科学紀要』6号, 2009.3, pp.21-38/谷釜尋徳:「大正期~昭和前半期の日本におけるバスケットボールのシュート技術の変遷」『体育学研究』55巻1号, 2010.6, pp.1-16)。

- 54) Ruby, How to coach and play basketball. Bailey&Hime, 1926, pp.95-96
- 55) Ruby, How to coach and play basketball. Bailey&Hime, 1926, p.95
- 56) Barry, Basketball, Clío Press, 1926, p.40
- 57) Ruby, How to coach and play basketball. Bailey&Hime, 1926, p.92
- 58) スポーツにおける視野の問題については石垣の研究に詳しい(石垣尚男:『スポーツと眼』大修館書店, 1992, pp.48-74)。
- 59) Bliss, Basket ball, Lea&Febiger, 1929, p.83
- 60) Lambert, Practical basketball, Athletic Journal, 1932, p.66
- 61) Holman, Winning basketball, Charles Scribner's Sons, 1932, p.21
- 62) Winter, The triple-post offense, Prentice Hall, 1962, p.180 /Sharman, (1965) Sharman on basketball shooting, Prentice Hall, 1965, pp.64-73/Hollander, Madison Square Garden, Hawthorne, 1973, p.76./Bjarkman, Hoopla—A century of college basketball—, Masters Press, 1996, pp.39-58/Bjarkman, The biographical history of basketball, Masters Press, 2000, pp.148-152/Palette, The game changer—How Hank Luisetti revolutionized America's great indoor game—, Author House, 2005, pp.15-43
- 63) Cooper and Sidentop, The theory and science of basketball, Lea&Febiger, 1969, p.16/Isaacs, All the moves—A history of college basketball—, Lippincott, 1975, p.113/Bjarkman, The biographical history of basketball, Masters Press, 2000, p.151/Palette, The game changer—How Hank Luisetti revolutionized America's great indoor game—, Author House, 2005, p.38
- 64) この時代のアメリカにおけるバスケットボールのショット技術については、谷釜らの研究成果を参照されたい(谷釜尋徳・佐野昌行:「1920~40年代のアメリカにおけるバスケットボールのショット技術の変遷」『スポーツ健康科学紀要』7号, 2010.3, 21-36)。
- 65) Jourdet and Hashagen, Modern basketball, W.S.Saunders, 1939, p.31
- 66) Jourdet and Hashagen, Modern basketball, W.S.Saunders, 1939, p.33
- 67) Bunn, Basketball methods, Macmillan, 1939, p.160
- 68) 岸野雄三監修:『スポーツ科学事典』ぽるぷ出版,

1982, p. 230

- 69) Murphy, Basketball, A.S.Barnes, 1938, p. 32

- 70) Bunn, Basketball methods, Macmillan, 1939, p. 154

とりわけ、引用の前半部分は、Ruppの1948年刊行の著作における「多くのプレーヤーは、ボールを持つとすぐにドリブルをしてしまう。パスを受けるとすぐにボールをワンバウンドさせるプレーヤーもいる。これらはとても悪い習慣なので、直ちに修正すべきである。」(Rupp, Rupp's championship basketball. Prentice Hall, 1948, p. 56)という記述と符合しており、Bunnがいうところのドリブルの「害」は、その後約10年が経過しても何ら改善されなかったことを意味している。このドリブルに対する批判に関しては、後年 Wooden も「ドリブルは非常に重要な武器である一方、これまで常に乱用ないし誤用され、過度に用いられてきた基礎技術である。(中略)ドリブルを誤って使用すれば、チームは精神面と技術面の両面において崩壊することは間違いない。」(Wooden,

Practical modern basketball, Ronald Press, 1966, p. 119)

と述べているように、長期的な課題となっていた。こうした事情を背景として、Smith が1980年代にドリブル主導の攻撃を否定する観点から「フリーランス・パッシング・ゲーム」を生み出しているが (Smith, Basketball—Multiple offense and defense—, Prentice Hall, 1981, pp. 26—39), 本稿は当該の問題に踏み込んで論じるものではない。

- 71) Dean, Progressive basketball—Methods and philosophy—, Stanford University, 1942, p. 119

- 72) マイネル著, 金子明友訳:『スポーツ運動学』大修館書店, 1981, p. 234

- 73) Navy, Basketball, United States Naval Institute, 1943, p. 59

- 74) Hobson, Basketball illustrated, A.S.Barnes, 1948, pp. 14—17

- 75) Rupp, Rupp's championship basketball. Prentice Hall, 1948, p. 56